

名古屋市立大学ミッドタウン名駅サテライトにて、「慢性疼痛の脳科学を臨床に活かす」を開催いたしました

- ・主催：名古屋市立大学大学院医学研究科
- ・後援：名古屋市
- ・企画：名古屋市立大学大学院医学研究科慢性疼痛運営委員会
文部科学省採択慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成事業
厚生労働省採択慢性疼痛診療体制構築モデル事業
- ・日時：令和2年2月11日（火曜日）午後2時～午後5時30分
- ・場所：JPタワー名古屋5階 名古屋市立大学ミッドタウン名駅サテライト
- ・参加人数：84名

・内容

【開会の挨拶】名古屋市立大学 学長 郡 健二郎

【講演1】「慢性疼痛へのアクセプタンス&コミットメント・セラピー（ACT）」

名古屋市立大学大学院 精神・認知・行動医学 臨床心理士 酒井 美枝

【講演2】「基礎脳科学から目指す慢性疼痛のトランスレーション研究」

東京慈恵会医科大学 神経科学研究部長／痛み脳科学センター長 加藤 総夫

【パネルディスカッション】「慢性痛の情動的側面と心理的介入の意義」

進行：名古屋市立大学病院 いたみセンター長 杉浦 健之

パネリスト：東京慈恵会医科大学 神経科学研究部長／痛み脳科学センター長 加藤 総夫

日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野 診療教授 加藤 実

名古屋市立大学大学院 薬学研究科神経薬理学 准教授 大澤 匡弘

名古屋市立大学病院 いたみセンター副センター長 近藤 真前

名古屋市立大学大学院 精神・認知・行動医学 臨床心理士 酒井 美枝

【閉会の挨拶】名古屋市病院局 局長 大原 弘隆

2020年2月11日（火）JPタワー名古屋5階 名古屋市立大学ミッドタウン名駅サテライトにて、「慢性疼痛の脳科学を臨床に活かす」と題し、講演会およびパネルディスカッションを開催しました。麻酔科医、精神科医ほか多くの臨床系医師と基礎研究系医師、看護師、理学療法士、臨床心理士、薬剤師、検査技師を含め多くの医療関係者や医学部・心理学部学生を中心に、71名（演者・スタッフ除く）にご参加いただきました。

本イベントは、慢性疼痛に関する脳科学の最前線と最新の心理療法を学び、これからの慢性疼痛治療にどのように活かしていくべきかを議論するために開催いたしました。

最初に郡学長から、「院内、地域、参集していただいた皆さんのある限りの力を集め、いたみセンターと連携していただくことが、慢性疼痛治療には必要である」とお伝えし、現在行っている事業に関して、志を継続することが重要であり、地道な継続が力になるとお伝えしました。

続いて、名古屋市立大学病院いたみセンターの酒井臨床心理士が、慢性疼痛治療における最新の認知行動療法について講演し、“痛みとの新しい関わり方を身につけながら、イキイキとした生活を取り戻す”アプローチとして、アクセプタンス&コミットメント・セラピー（ACT）をご紹介します、行動科学から見た苦悩の増幅システムと、そのシステムにACTがいかに関わるか、を概説しました。

東京慈恵会医科大学 神経科学研究部長／痛み脳科学センター長の加藤総夫先生には、臨床現場で困っている状況と基礎生物実験をどうやって繋げるかを明快に解説いただき、生物進化の過程と痛みの経路について、楽しく勉強させていただきました。また、痛みの脳科学では、ペインマトリクスの中で、特に扁桃体を中心とした不快情動のシステム機能の重要性をお示しいただき、慢性痛は“侵害受容主義”ではなく“中枢性感作・脳中心主義”との考えで理解する必要がある、と解説いただきました。

講演会後には「慢性痛の情動的側面と心理的介入の意義」をテーマとしたパネルディスカッションを行いました。キーワードを、①痛みの情動的側面とその増幅 ②痛みの「情動」って何!? ③慢性疼痛中枢機序～私のROI（Region of Interest）として、パネリストから話題提供がなされ、それぞれ大変活発な議論が行われました。討論の最後では、日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野の加藤実先生に、慢性痛診療の将来について、展望と期待をお話いただきました。

参加者には医療従事者に加え学生も多く、熱心に耳を傾けている様子でした。アンケートにおいては、96%の方が内容に満足したとお答えいただき、「基礎研究と臨床応用のバランスがとてもよく、理解しやすかった。」「脳活動とのつながりから痛みをととても分かりやすく理解することができた。」などのご感想をいただきました。貴重なご意見も頂戴しましたので、今後、研修会等の参考にさせていただきます。たくさんのご参加ありがとうございました。



講演会の様子（講師：加藤総夫先生）



講演会の様子（講師：酒井美枝心理士）



パネルディスカッションの様子